

菊本副院長の漢方問答 その66



問 「生活習慣病の漢方治療とは

どのようなものですか？」④

答 肥満と関係が深い「糖尿病」「高血圧」「脂質異常症」などの生活習慣病に関する漢方治療について、日本東洋医学会が出版している「漢方医学テキスト」には記載されていますが、当院でよく処方されるお薬に関して、お話しています。

今回は、「半夏瀉心湯」です。半夏瀉心湯は、「傷寒論」と「金匱要略」という、漢方で最も重要な古典で紹介されています。構成生薬は、半夏、黄芩、乾姜、人参、甘草、大棗、黄連です。「吐き気がして、お腹がコロコロと鳴って、胃のあたりが痞えるときには、半夏瀉心湯が有効である」と記載されています。

図1は、江戸時代に発行された「腹証奇覽」に掲載されている半夏瀉心湯の腹証図です。ちょうど胃の



図1

あたりに所見があります(①)。図2は、私の漢方の師匠が描かれた半夏瀉心湯の腹証図です。図1とほぼ同じ部位(②)に所見があります。

水の流れが悪くなり、むくんでいることを表しています(水滯といいます)。この水滯が大きいものであれば、以前にお話した「五苓散」の出番なのですが、半夏瀉心湯は、割と小さい水滯をとることを得意としています。生薬の作用としては、半夏が胃のあたりに滞っている水をさばきます。ニンジンが胃のあたり

の気を上から下へと押し下げ、半夏の作用を助けます。からだの深いところの冷えを乾姜が温め、からだの表面の熱を黄連や黄芩が冷まします。

半夏瀉心湯を、治療の当初から使用することはほとんどありません。大きく、血の流れ、水の流れ、気の流れをととのえた後、胃のあたりに残った水滯を、こまかく丁寧に改善してくれるお薬です。

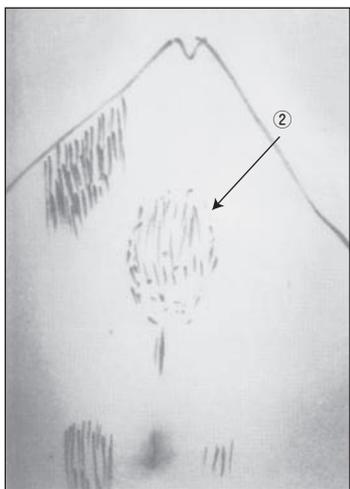


図2

